

♪ 2019年度 *poco a poco* ♪

Nr. 8 2019年7月17日(水) 文責:プファイル・辰巳

1学期のミニコンサートを終えて・・・

7月11日木曜日の放課後、今年度初のミニコンサートが無事終わりました。演奏者として、または聴衆としてご参加くださった方々、お疲れ様でした。

プログラムが30番までということで、比較的早い時刻に終わることができました。また、上手に譲り合っていたいたお陰で、客席の方も余裕があったようです。ご協力ありがとうございました。

～聴き上手になろう!～

今後、もう少し気をつけていただきたいなと思った点は、「おしゃべり」の多さと声の大きさです。ミニコンサートとはいえ、長時間に及ぶ演奏会ですから、その間、もちろん一言もしゃべらないというわけにはいきませんし、曲と曲の間に少し息抜きも必要でしょう。けれども、たとえ曲と曲の間とはいえ、コンサート中は会場にある種の緊張感が漂っているのが、演奏会本来の姿ではないかと私は考えています。その適度な緊張感が演奏者の集中力を高め、すばらしい演奏を生み出す土台となります。少なくともクラシックのコンサート会場やオペラ劇場に来ているのに、平気で大声で話したり、演奏が始まってもコソコソ話を続けたりするような人には、日本人学校の子もたちにはなってほしくないのです。2学期のミニコンサートでは、演奏が上手なだけでなく、聴き上手にもなってくださいね。

～反省を次へのステップにして～

今年度のミニコンサートは、まだ2回あります。チャンスを生かして、さらにステップアップしてください。今度はどんな演奏が飛び出すのかな? 楽しみにしています!



音楽こぼれ話 <大作曲家の家族たち ④スカラッティ父子

～1685年生まれの大作曲家トリオとは?～

中学部2年生のみなさんと学習したイタリア・バロック時代の作曲家スカラッティ。実は、大バッハと子どもたちやヨハン・シュトラウス父子のように、スカラッティもアレッサンドロとドメニコの父子共々が、作曲家として活躍し、作品を残しています。

ドメニコ・スカラッティ



父のアレッサンドロは1660年シチリア島(当時のシチリア王国)に生まれ、各地を転々としながらオペラを中心に作曲し、最後は1725年にナポリ(ナポリ王国)で息を引き取りました。

その息子ドメニコは1685年にナポリで生まれました。16歳でナポリの教会付き作曲家兼オルガン奏者となり、音楽家としての活躍が始まりました。1720年ごろからはリスボンに移住し、王女様の音楽教師になります。この王女様が後にスペイン王家に嫁いだので、ドメニコもマドリッドへと移動します。1757年に71歳で没するまでマドリッドにとどまりました。ドメニコ・スカラッティの一族は今日でもスペインで生活しているそうです。

父のアレッサンドロがオペラ作曲に力を入れていたのに対し、ドメニコの方は鍵盤楽器の曲をたくさん作曲しました。明るく軽快なタッチで今日でもチェンバロやピアノで頻りに演奏されるのは、この息子ドメニコの作品です。

さて、ドメニコが生まれた1685年には、ドイツでもバロックの二大巨匠 J.S. バッハ(マタイ受難曲やクリスマス・オラトリオなどの作曲家)と G.F. ヘンデル(ハレルヤコーラスを含む「メサイヤ」や「水上の音楽」、数々のオペラを作曲)が生まれています。バッハの方は東ドイツを中心に教会音楽家として活躍し、「音楽の父」と呼ばれているのは周知のことと思います。ヘンデルもドイツ東部ハッレで生まれましたが、こちらは国際的作曲家です。まずはイタリアで活躍しました。イタリア滞在中にドメニコ・スカラッティとチェンバロの腕比べをしたこともあるそうです。後にはロンドンに移住し、イギリスに帰化、イギリス王家からも重宝され、ウエストミンスター寺院に葬られています。このように「1685年」は奇遇にも3人もの大作曲家が生まれた、バロック時代最盛期への礎となった年でありました。ちなみに、元々は同国人でありながら、バッハとヘンデルの会見は実現せぬまま二人は生涯を終えたということです。